近世期の北上川沿いに設けられた盛岡藩御蔵所の空間構成の特質

SPATIAL STRUCTURE CHARACTERISTICS OF *OKURA-DOKORO* OWNED BY THE MORIOKA DOMAIN LOCATED ON THE KITAKAMI RIVER IN THE EDO PERIOD

相模 誓雄*
Chikao SAGAMI

The aim of this study is to illustrate the spatial structure characteristics of *Okura-dokoro* located along the Kitakami River in the Morioka Domain during the Edo period. We applied the typological methods to analyze the features of spatial constituent elements and compositions of *Okura-dokoros*. As the results, four *Okura-dokoros* in Morioka Domain were categorized in a type, while their counterparts in other Tohoku domain's *Okura-dokoros* located on the rivers are categorized in other types, and when compared, the uniqueness of Morioka Domain's *Okura-dokoros* were highlighted.

Keywords: Storehouse, Premises, Spatial structure

蔵, 屋敷, 空間構成

1. はじめに

藩政初期、盛岡藩は、年貢米の徴収と北上川水運を用いて江戸廻米を行なうため、北上川沿いの城などの要衝に御蔵所¹⁾を設けた。御蔵所に納められた年貢米は、廻米として最寄りの河港から船で積み出されて北上川を川下げされ、河口の石巻港から海路を経て江戸へ運ばれたのである。北上川の上・中流部は盛岡藩領、中・下流部は仙台藩領であった(図1)。盛岡藩領内の中流部では、小型の小繰船が用いられたので、途中で廻米を大型の櫓(ひらた)船に積み替える必要があった。和賀郡黒沢尻村里分には中継港が設けられ、この河港が御蔵所や船問屋の業務などによって大いに繁栄したことはよく知られるところである²⁾(図2)。

藩政後期の盛岡藩領北上川沿いにおいて年貢米の徴収及び、廻米輸送に用いられた御蔵所は、上記の中継港の黒沢尻村里分の他に、稗貫郡の花巻城内・外(それぞれに1ヶ所)、志和郡二日町新田村の郡山城跡にあった(後掲表1)。また、盛岡城下の新山河岸にも御蔵所があったが、この御蔵が藩政後期において年貢米の徴収及び、廻米輸送に用いられたことを示す文献は見られない³⁾。

2. 研究の視点

盛岡藩領北上川沿いの御蔵所の実態については、佐嶋與右衛門らの編集による後掲『北上川第6輯』において御蔵所毎にまとめられている。また、櫻井善三郎は、黒沢尻御蔵所の施設について詳述している⁴⁾。これらは、御蔵所毎の検討に留まっており、空間構成の共通性及び、その意味の検討はなされていない。このような地方に

図1 盛岡藩領と北上川

図2 文政11年(1828)の黒沢尻河港集落

おける藩の水運施設に関する研究は、建築遺構が殆どないこともあって日本建築史学において空白の部分であった。しかし、近世における大量の物資の輸送手段は水運であり、各地の河川沿いに施設があった。また、地方の藩の水運施設は、江戸や大坂の御蔵屋敷とは

* 宮城大学事業構想学部デザイン情報学科 助教・博士(工学)

Assistant Prof., Dept. of Spatial Design and Information Systems, Faculty of Project Design, Miyagi Univ., Dr. Eng.

表 1 藩政後期の北上川沿いにおいて、年貢米の徴収や廻米輸送に用いられた盛岡藩御蔵所一覧表

郡名	城・村名	御蔵所の名称		旧跡 () は藩政初期
		旧名	新名	
和賀	黒沢尻村里分	黒沢尻御蔵所		黒沢尻柵・館
稗貫	花巻城	本御蔵所	西御蔵所	鳥谷ヶ崎城
		新御蔵所	南御蔵所	
志和	二日町新田村	郡山御蔵所	日詰御蔵所	高水寺城(郡山城)

異なり、地方性豊かな空間構成になっていたことが予想され、空間構成及び、その意味の解明が期待される。

過去に筆者らは、黒沢尻御蔵所の実態を示した⁵⁾。また、藩政後期の東北地方の主たる河川沿いにおける、仙台藩の「御蔵場」⁶⁾、米沢藩の「御蔵屋敷」⁷⁾、会津藩領塩川村における2ヶ所の年貢米を納める御蔵所⁸⁾、弘前藩の御蔵所⁹⁾それぞれに、空間構成の共通性・型式が見られることを明らかにした。前記した盛岡藩における御蔵所の間にも、同じ空間構成要素・施設が見られ、それらの建物配置には、他の地域における御蔵所の型式と異なる点があり、特異な空間構成になっていたことが予想される。

そこで本研究は、第一に、藩政後期の北上川沿いに存在した盛岡藩御蔵所を対象として、御蔵所毎に空間構成要素・施設を抽出し、空間構成を明らかにする。第二に、4ヶ所の御蔵所の空間構成の共通性を検討し、本御蔵所の型式を示す。第三に、その特質を明らかにするため、東北地方の主たる河川沿いにおいて藩毎に見られた御蔵所の型式と比較する。さらに、その意味の検討から東北地方において本御蔵所が特異な空間構成になった原因についての考察を試みることにする。現在、対象とする4ヶ所の御蔵所跡地は、住宅地や商業地などに変わっており遺構調査が不可能なものがある。従って、絵図や文献の史料を用いた研究の有効性が認められる。

3. 盛岡藩御蔵所の空間構成の型式

3.1 御蔵所の空間構成要素・施設と配置

御蔵所の建物の種別やそれらの配置が知られる絵図史料には、弘化3年(1846)の『黒沢尻御蔵并御船所御船所御用地繪圖面』(図3)と明治7年(1874)の『稗貫和賀両郡御蔵其他繪圖面』(図4)がある。なお、後者には、黒沢尻御蔵所や花巻城の西御蔵所が描かれている。図4は、明治初期の作であるが、主たる部分の輪郭は藩政期の絵図と殆ど同じであり、天保4年(1833)に実施された小駄納めの蔵も見られるので¹⁰⁾、本図から藩政後期の御蔵所を見ても大過ないと考えられる。以上の史料が見られるので、初めに黒沢尻御蔵所と花巻城の西御蔵所の空間構成要素・施設とそれらの配置を示し、次に花巻城の南御蔵所と日詰御蔵所について検討することにする。

3.1.1 黒沢尻御蔵所

黒沢尻御蔵所は、北上川右岸の自然堤防上に位置した。ここは、古代の黒沢尻柵¹¹⁾(図2)、中世期の和賀氏の支族、黒沢尻氏の館が存在した川岸である¹²⁾。慶安元年(1648)、盛岡藩もこの土地に御蔵所を設置した¹³⁾。これに伴い水運関係の仕事に従事する人々が居住し、河港集落が形成されたと考えられる¹⁴⁾。御蔵所は、藩の廻米専用の船着場や「御船所」に近接していた(図3)。

図3 弘化3年(1846)の黒沢尻御蔵所と御船所

図4 花巻城の西御蔵所

(1) 敷地内の空間構成要素・施設と配置

図3の御蔵所の敷地内には、「北御蔵」、「南御蔵」、「東御蔵」、「斗御小屋」、「御蔵奉行役所」が見られる。これらの御蔵には、周辺の村々の年貢米¹⁵⁾や、上流から船で運ばれてくる廻米が収納された。「斗御小屋」は、年貢米の計量などを行なう検査所と考えられる。

御蔵は、中庭を囲んで配置されている。「斗御小屋」は、中庭に設けられ、全ての御蔵を繋いでいる。一方、「御蔵奉行役所」は、独立の建物であり、街道側の入口に位置し、「斗御小屋」に対する。

(2) 周囲の空間構成要素・施設

文政11年(1828)の『黒沢尻川岸絵図』(図2)や明治7年(1874)の『稗貫和賀両郡御蔵其他繪圖面』の黒沢尻御蔵所は、柵や生垣で囲まれている。そして、街道側と河川側それぞれに門が開かれている。さらには、その周囲に堀割が見られる。

図3の御蔵所の、道を挟んだ北もしくは北西隣に「上俵縄入御小屋」、南もしくは南東隣に「御船所」といった藩の施設や「御役屋見守弥作家」が見られる。

3.1.2 花巻城の西御蔵所

花巻城は、北上川西岸の台地上に位置した。ここには、中世期に鳥谷ヶ崎城が設けられていた。近世期の花巻城は、この城跡を活かして築かれた¹⁶⁾。城内に設けられてあった盛岡藩の御蔵は、年貢徴収範囲の拡大の影響もあってか¹⁷⁾、天和3年(1683)に城外の北上川沿いの土地へ移され¹⁸⁾、「本御蔵」と呼ばれた。また、この時、城内には「新御蔵」も存在した¹⁹⁾。文化13年(1816)、「本御蔵」

は「西御蔵」、「新御蔵」は「南御蔵」に改称された²⁰⁾。文政期（1818～1829）頃の『花巻御城廓圖』（図5）を見ると、これらの御蔵所は、廻米を船で積み出す北上川川岸からやや離れて位置しているが、藩政前期の北上川は、西御蔵所の近くを流れていた。

（1）敷地内の空間構成要素・施設と配置

図4の西御蔵所の敷地内には、「大俵蔵」、「小駄蔵」、「大豆蔵」、「縄蔵」、「斗立御小屋」、御役所が見られる。

御蔵は、中庭を囲んで配置されている。「斗立御小屋」は、中庭に設けられ、年貢米を収納する「大俵蔵」と「小駄蔵」を繋いでいる。御役所は、「斗立御小屋」に接している。

（2）周囲の空間構成要素・施設

西御蔵所は、城外に位置した。図4を見ると、周囲を柵や屋敷林で囲まれ、門が街道や船着場へ至る道へ向かって開かれている。さらには、町場と、土塁と見られる枡形で隔てられている（図6）。

3.1.3 花巻城の南御蔵所

（1）敷地内の空間構成要素・施設と配置

この御蔵所については、建物の種別及び、それらの配置が知られる絵図史料が現存しないが、御蔵と斗御小屋があったことが知られる²¹⁾。図5には、建物の輪郭のみが描かれている。図4の西御蔵所の建物配置や、門と建物の中心部分を結ぶ道筋が見られることから、中心部分は検査所の斗御小屋、これを囲む3棟は米蔵と見られる。また、独立の建物も1棟描かれており、これは御役所と思われる。

（2）周囲の空間構成要素・施設

南御蔵所は、「御囲穀御蔵」とともに城内に位置した。これらの敷地は堀や柵で囲まれ（図5）、「御蔵前御門」が街道へ至る道へ向かって、「東御門」が北上川の船着場へ至る道へ向かって開かれている。さらには、その周囲に掘割が見られる。

3.1.4 日詰御蔵所

日詰御蔵所は、二日町新田村内の北上川西岸の山麓に位置した。この山には、中世期の高水寺城、藩政初期の盛岡藩の郡山城が存在した²²⁾。寛永6年（1629）、後者の城下町は奥州道中の宿駅であった²³⁾。慶安期（1648～1651）頃、街道沿いに分散していた御蔵所は²⁴⁾、寛文7年（1667）の郡山城取り壊しの後²⁵⁾、その跡地の一部に統合されたと考えられる。このように御蔵所は、廻米を船で積み出す北上川川岸からやや離れて位置した。

（1）敷地内の空間構成要素・施設と配置

この御蔵所も、建物の種別及び、それらの配置が知られる絵図史料が現存しないが、明治9年（1876）の御蔵の払い下げに関する覚書には、一番から四番までの御蔵、「上俵縄御蔵」、「斗小屋」、「役所」が記されている²⁶⁾。また、弘化3年（1846）の『二日町新田村絵図』（後掲図7）の御蔵所には、コの字型に中庭を囲む4棟の建物（a）とこれらを繋ぐ部分（b）、中庭に独立の建物（c）が描かれている。これらの史料とこれまで見てきた御蔵所の配置の例から、（a）は御蔵、（b）は「斗小屋」、（c）は「役所」と見ることができよう。

（2）周囲の空間構成要素・施設

後掲図7を見ると、敷地は屋敷林で囲まれている。御蔵所の東側に御蔵坂道が通り、この道に面する門があった²⁷⁾。さらには、その周囲に崖が描かれている。なお、現在の御蔵所跡地の周囲も崖になっている。

図5 文政期（1818～1829）頃の花巻城における西御蔵所と南御蔵所 下図は南御蔵所部分

図6 花巻城の西御蔵所付近

3.2 盛岡藩御蔵所の空間構成の型式

3.2.1 敷地内の空間構成要素・施設と配置の共通性

4ヶ所の御蔵所それぞれに御蔵、斗御小屋が見られる。また、花巻城の南御蔵所を除く3ヶ所の御蔵所それぞれに役所が見られる。なお、花巻城の南御蔵所についてもその存在がうかがわれた。これらの要素の配置には、以下の共通性が見られる。

第一に、御蔵は、中庭を囲んで配置されている。第二に、斗御小

屋は、中庭の中心において御蔵と御蔵を繋いでいる。第三に、役所は、斗御小屋に対する空間構成になっている。

3.2.2 周囲の空間構成要素・施設の共通性

4ヶ所の御蔵所それぞれに、柵や屋敷林などの「第一の囲い」が見られ、門が街道や船着場へ至る道へ向かって開かれている。さらには、その周囲に、黒沢尻御蔵所や花巻城の南御蔵所の場合堀割、花巻城の西御蔵所の場合枳形、日詰御蔵所の場合崖といった「第二の囲い」が見られる。このように敷地は、「第一の囲い」と「第二の囲い」によって二重に囲まれている。

3.2.3 小まとめ

以上の空間構成要素と配置の共通性が見られることから、図8中、右列上段に示す、藩政後期の北上川沿いにおける盛岡藩御蔵所の空間構成の型式（以後、「盛岡藩型」と記す）が考えられる。

4. 盛岡藩型の空間構成の特質

4.1 盛岡藩型に固有な空間構成

図8は、筆者がこれまでに明らかにした、藩政後期の東北地方の主たる河川沿いに存在した諸藩の御蔵所の型式を図化したものである。なお、米沢藩型の場合、領内の複数の御蔵屋敷と領外の中継港において御蔵が設けられた屋敷（1ヶ所）との間で、会津藩・塩川型の場合、年貢米を納める御蔵所と廻米を納める御蔵所との間で、空間構成要素及び、空間構成が異なっていた。本研究では、他藩の型式と比較するため、いずれについても年貢米の徴収の機能を有する前者を取り上げる。複数の藩型に見られる空間構成要素は、敷地内については、御蔵、検査所、番屋、藩の役人の居所である。周囲については、囲い、門である。これらの要素毎にその配置を比較し、盛岡藩型にのみ固有な空間構成を明らかにする。

4.1.1 敷地内

(1) 御蔵

仙台藩型を除く全ての藩型において御蔵は、中庭を囲んで配置されている（図8）。この配置は、年貢米の運び入れや御蔵の防火の空間構成原理に因るものである²⁸⁾。なお、仙台藩型についても、御蔵を防火上有利な場所に配置して、防火に配慮していた²⁹⁾。盛岡藩型の場合、中庭の中心において検査所の斗御小屋が全ての米蔵を繋いでおり、より年貢米の運び入れに配慮されていると見られる。一方、防火の観点から見ると、斗御小屋は吹き曝しであるものの³⁰⁾、御蔵と御蔵を繋いでいるのでやや不利と思われる。

(2) 検査所

御蔵所に年貢米が運び込まれると、早速米の量や品質の検査が行われた。仙台藩型や会津藩・塩川型において検査所は、入口寄りに位置する（図8）。弘前藩型や米沢藩型の検査所は明らかでないが、前者については、入口寄りの「御長屋」の中に立合や枳取の居所があった³¹⁾。一方、盛岡藩型の斗御小屋は、中庭の中心において全ての米蔵を繋いでおり、他の藩型の空間構成とは異なっている（図8）。さらには、弘化3年（1846）の『黒澤尻御蔵并御膳所御船御繕所御用地繪圖面』（図3）を見ると、斗御小屋に接して「見張之間」という部分もあり、ここで、藩の役人などが、年貢米の検査及び、御蔵への収納の様子を監督したものと推測される。

(3) 番屋

蔵番が村人である仙台藩型や会津藩・塩川型において番屋は、年

図7 弘化3年（1846）の郡山城跡 右図は日詰御蔵所部分

図8 東北地方の主たる河川沿いにおける御蔵所の空間構成の型式

貢米の受け入れの空間構成原理などにより、入口寄りに設けられる³²⁾（図8）。藩士が御蔵守として敷地内に居住した米沢藩型では、蔵守家が敷地の北西側に設けられる³³⁾。

一方、弘前藩型や盛岡藩型において番屋は見られない。これらの藩では、御蔵奉行が御蔵所の管理運営に当たっていた³⁴⁾。盛岡藩の場合、実際は、御蔵の管理をその手下の町人が行っており³⁵⁾、この者は、御蔵所に近い町場に居住していたと推察される³⁶⁾。実は、盛岡藩型にも民間人の蔵番がいたが、北上川沿いの御蔵所内には、その者の持ち家もしくは、借家が一切設けられなかったのである。

(4) 藩の役人の居所

全ての藩型において藩の役人の居所が見られる。但し、藩型によって名称、作り方や配置が異なる。弘前藩型の場合、前述の「御長

屋」の中に御蔵奉行の居所がある³⁷⁾。米沢藩型の場合、敷地内に藩士が居住したことを前述した。会津藩・塩川型の場合、検査所の中に「上段」がある³⁸⁾。仙台藩型の場合、敷地の入口寄りに「会所」がある。盛岡藩型の場合、斗御小屋に対する場所に役所がある(図8)。

4.1.2 周囲

(1) 囲い

ほぼ全ての藩型において柵、塀、垣、屋敷林などのうち、いずれかによる囲いが見られる(図8)。これらの要素に共通する空間構成原理は、御蔵の防犯と考えられる³⁹⁾。

盛岡藩型の場合、さらに掘割や崖などによって囲まれていた。このように、盛岡藩型にのみ二重の囲いが見られる。

(2) 門

会津藩・塩川型を除く全ての藩型において門が見られる⁴⁰⁾。

4.1.3 小まとめ

以上の検討から盛岡藩型にのみ固有な空間構成として、第一に、検査所が敷地の中心を占め、全ての米蔵を繋ぐ点、第二に、周囲に二重の囲いが見られる点があげられる。このような盛岡藩型の姿は、他の藩型と異なる部分が顕著であり、特異な空間構成になっていると考えられる。

4.2 盛岡藩型に固有な空間構成の意味

前節において明らかにした盛岡藩型にのみ固有な空間構成の意味を検討する。

(1) 敷地内において斗御小屋が中心を占めることの意味

斗御小屋では、藩の役人が年貢納めの全工程を掌握できたと考えられ、比較対象となった他の藩型よりも、年貢米の検査及び、収納に有利な空間構成になっている。つまり、斗御小屋の空間構成は、藩の管理による、より厳格で効率的な年貢米の検査及び、収納を意味すると考えられる。

(2) 二重の囲いの意味

盛岡藩は、領内支配の拠点として天然の要塞である中世の城跡や館跡を利用した。このような、藩の管理下にあつて最も安全な場所に御蔵所を設けて江戸廻米を営んだのである。なお、御蔵には、藩財政の重要な収入源である米が保管されていた。

また、二重の囲いを設けることで、周辺の屋敷地との間に一定の距離が保たれており、火除け地が確保されていると見られる。なお、黒沢尻御蔵所の場合、御蔵所の西隣は道になっているが、この道の西側の屋敷地を火除け地としていた⁴¹⁾。

つまり、二重の囲いは、土地の有効利用は然る事ながら、藩の管理による、より厳格な御蔵の防犯・防火を意味すると考えられる。

5. まとめ

本研究によって、藩政後期の北上川沿いにおいて、年貢米の徴収や廻米輸送に用いられた盛岡藩御蔵所の空間構成について、以下のことが明らかになった。

第一に、対象とした4ヶ所の御蔵所に共通する空間構成要素・施設は、敷地内については、御蔵、斗御小屋、役所、周囲については、柵や屋敷林などの第一の囲い(門を含む)、掘割や崖などの第二の囲いであった。

第二に、対象とした4ヶ所の御蔵所に、空間構成要素・施設の配

置の共通性が見られた。このことから、次の盛岡藩型を示した。敷地内については、御蔵が中庭を囲み、中庭の中心において斗御小屋が全ての米蔵を繋ぎ、役所が斗御小屋に対するものであった。周囲については、第一の囲いがあり、門が街道や船着場へ至る道へ向かって開かれている。さらにその外側に第二の囲いがあり、二重に囲まれるものであった。

第三に、盛岡藩型と東北地方の主たる河川沿いにおける諸藩の御蔵所の型式を比較することによって、盛岡藩型の空間構成の特質を明らかにした。

東北地方において盛岡藩型にのみ固有な空間構成は、藩の役人が検査及び、収納を掌握可能な斗御小屋が敷地の中心に設けられ、全ての米蔵を繋ぐことであった。その役人の居所が斗御小屋の近くに見られた。また、御蔵所が中世期の城跡や館跡に立地し、周囲に二重の囲いを有することであった。これらの空間構成の意味するところは、藩の管理による、より厳格な、年貢米の検査及び、収納、御蔵の防犯・防火であった。

以上の検討の結果から、藩政後期の東北地方の主たる河川沿いにおいて盛岡藩型が特異な空間構成となった原因は、盛岡藩の厳格な廻米政策と御蔵所の特異な立地にあると結論づけられる。御蔵所は、領内の年貢米を徴収し、江戸や大坂へ廻米を行うという諸藩に共通の目的を有しているが、その空間構成には藩によって異なる地方性も見られることがわかる。

謝辞

本研究をまとめるに当たっては、長い年月を要した。その間、様々な方々に貴重なご助言をいただいた。ここに深く感謝申し上げる。

注

- 1) 本研究では、敷地全体を「御蔵所」、建物の蔵を「御蔵」と記して区別している。但し、「御蔵所」は、文献や絵図史料において「御蔵」と記されることが多い(図2、後掲図5、後掲図6、後掲図7)。
- 2) 安政2年(1855)に設立された「東講」の講中に配布された「東講商人鑑」の黒沢尻河港には、2軒の船問屋や4軒の商家及び、商人の名前が記されている。さらには、「御船御細工処」、「御體所」や「御番所」といった藩の諸施設も存在した。
- 3) 諸富大・遠藤匡俊:北上川舟運による盛岡藩の江戸廻米輸送, 歴史地理学, 第40巻, 第4号, p.5, 1998.9 本書掲載の表「盛岡藩の北上川舟運による輸送品目と蔵割」に、明和2年(1765)春、文化13年(1816)冬、嘉永元年(1848)冬、安政元年(1854)春、同冬、文久元年(1861)冬、文久2年(1862)春の輸送品目と数量が御蔵所毎にまとめられている。新山御蔵所は記されていない。なお、盛岡城内の本御蔵所や新御蔵所の為御登米は、明和2年(1765)の1回のみである(3786俵)。新山御蔵所は、幕末期に備荒貯蓄用の枳蔵として使用されていたことが知られている。
- 4) 櫻井善三郎:南部藩黒澤尻御蔵について, 快光, 第1巻, 第2号, pp.30~32, 1932.8
- 5) 中川学・飯淵康一・永井康雄・相模誓雄:近世における北上川沿いの河港集落の空間構成に関する研究(その1)~積替え機能を有する黒沢尻を対象として~, 日本建築学会東北支部研究報告集計画系, 第68号, pp.193~196, 2005.6
- 6) 相模誓雄・飯淵康一・永井康雄:仙台藩領北上川流域の集落における御蔵場に関する研究一路村を中心として-, 民俗建築, 第130号, pp.15~24, 2006.11
- 7) 相模誓雄:近世期の最上川沿い米沢藩御蔵屋敷の空間構成に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第74巻, 第641号, pp.1655~1660, 2009.7
- 8) 相模誓雄:近世期の河川沿いにおける会津藩の水運施設の空間構成に関する研究ー塩川御蔵所を事例として-, 日本建築学会計画系論文集, 第75巻, 第653号, pp.1721~1727, 2010.7
- 9) 相模誓雄:東北地方の河川流域に形成された近世集落の空間構成に関する研究, 東北大学大学院工学研究科博士論文, pp.1~192, 2008.3

- 10)「新川文書」(北上川第 6 輯,東北地方建設局岩手工事事務所,1977, p. 432 所収),天保 4 年(1833) 本年は凶作のため、従来の大俵による納入でなく、小荷駄俵による納入(小駄納め)となった。
- 11)「邦内郷村志」(南部叢書第 5 冊,南部叢書刊行会,1929, p. 516 所収) 本書に黒沢尻柵について、「在北上川西岸上。(中略) 康平五年(1062) 安倍貞任弟黒澤尻五郎正任保此城。陸奥守源頼義攻之。(後略)」と記されている。
- 12)北上市教育委員会編,文化財調査報告第 20 集 川岸遺跡調査概報,1977, p. 4
- 13)川端理平治:「二子物語(写)」(盛岡市中央公民館蔵),天保 2 年(1831) 本書に、「一川岸御蔵ハ慶安元戊子年建」と記されている。この御蔵は、黒沢尻村里分川岸の御蔵所と考えられている。なお、「雑書」(盛岡藩雑書第 1 巻,熊谷印刷出版部,1986, pp. 485 所収)の慶安 3 年(1650) 閏 10 月 28 日の条に、「一 黒沢尻御蔵奉行ニ小笠原弥蔵被仰付、夏井弥左衛門相手」と記されており、慶安 3 年(1650)に御蔵奉行が任命されている。
- 14)「鉄道開通前に於ける北上川の重要河港たる黒沢尻川岸に就いて」(北上市史第 8 巻,北上市史刊行会,1983, p. 758 掲載) 本書に、「維新直前の黒沢尻川岸の全戸数百四十戸内外中殆ど全部が水運に関係し、当時船乗は約三百人、」と記されている。
- 15)「御蔵・御艀所書留」(北上市史第 8 巻, p. 269 所収),嘉永 7 年(1854) 本書に、「(前略) 右此度御用米黒沢尻川岸より御城下新山川岸迄、為積登方被仰付、(後略)」と記されており、黒沢尻御蔵所の年貢米が盛岡城下へ運ばれている。
- 16)菊池悟郎編:南部史要全, 1911, p. 70 本書に、天正 19 年(1591)に鳥谷ヶ崎城を花巻城と改称したことが記されている。そして、慶長 18 年(1613)に南部政直が城主として赴任し、城郭の整備が行われた。
- 17)「花巻年契」(花巻市史第 4 巻,国書刊行会,1981, p. 9 所収) 本書の寛文 10 年(1670)の条に、「八幡村 石鳥谷町御年貢 郡山御蔵へ納ムル所 今年ヨリ花巻御蔵へ納ムル」と記されている。
- 18)前掲 17)「花巻年契」(花巻市史第 4 巻, p. 11 所収) 本書の天和 3 年(1683) 7 月 19 日の条に、「本御蔵御城内ヨリ早坂へ引ク」と記されている。
- 19)「雑書」(盛岡藩雑書第 5 巻,熊谷印刷出版部,1991, p. 9 所収) 本書の天和 3 年(1683) 1 月 12 日の条には、花巻城の「本御蔵」と「新御蔵」が見える。
- 20)「和賀御役所書留」(北上市史第 8 巻, p. 192 所収),文化 13 年(1816) 本書の 8 月 28 日の条に、「(前略) 花巻本御蔵之事一西御蔵 花巻新御蔵之事南御蔵 右之通以来相唱候様御沙汰之由、(後略)」と記されている。
- 21)「雑書」(盛岡藩雑書第 12 巻,熊谷印刷出版部,1998, p. 48 所収) 本書の享保 6 年(1721) 4 月 4 日の条に、去る 3 月 29 日の花巻大火において焼失したものとして、新御蔵所(南御蔵所)の御蔵、斗御小屋が記されている。
- 22)前掲 16) 菊池悟郎編:南部史要全, p. 70 本書に、天正 19 年(1591)に高水寺城を郡山城と改称したことが記されている。
- 23)紫波町史編集委員会編:紫波町史第 1 巻,紫波町,1972, p. 924
- 24)前掲 23) 紫波町史編集委員会編:紫波町史第 1 巻, p. 341
- 25)「雑書」,(盛岡藩雑書第 2 巻,熊谷印刷出版部,1987, p. 556 所収) 本書の寛文 7 年(1667) 8 月 22 日の条に、「一 今日郡山御城御家こほし候吉日にて、奉行松岡八左エ門・松尾吉左エ門大工小者先日遣候こほし候様ニと申付」と記されている。
- 26)「永代諸用書留帳」(紫波町史第 3 巻,紫波町,1988, pp. 294~295 所収), 天保 4 年(1833)~明治 21 年(1888)
- 27) 図 7 に門は描かれていないが、紫波町教育委員会所有の『二日町新田弘化三年春郷村御改之大繪圖小繪圖此度弘化四年末十一月分間之縮圖』(写真)の御蔵所に門、柵や屋敷林が見られる。門は、御蔵所の庭から東側の御蔵坂道へ向かって開かれている。
- 28)前掲 8) 近世期の河川沿いにおける会津藩の水運施設の空間構成に関する研究―塩川御蔵所を事例として―, p. 1725
- 29)前掲 6) 相模磐雄・飯淵康一・永井康雄:仙台藩領北上川流域の集落における御蔵場に関する研究―路村を中心として―, pp. 20~21 御蔵を卓越風の風上に配置して町場の大火時の類焼を防止したと考えられた。
- 30)斗御小屋の構造が知られる図面は現存しないが、壁のない吹き曝しであったことが伝えられている。なお、花巻市博物館の花巻城の両御蔵所の展示模型や、北上市立博物館の黒沢尻御蔵所の展示模型も、斗御小屋を吹き曝しとしている。

- 31)「藤崎御蔵御長屋之圖」,八木橋文庫「津軽藩諸役所倉庫圖式一部」の一枚(弘前市立弘前図書館蔵)
- 32)前掲 8) 相模磐雄:近世期の河川沿いにおける会津藩の水運施設の空間構成に関する研究―塩川御蔵所を事例として―, p. 1725
- 33) 前掲 7) 相模磐雄:近世期の最上川沿い米沢藩御蔵屋敷の空間構成に関する研究, pp. 1659
- 34)「雑書」,(雑書第 17 巻,齊藤勝己,2004, p. 193 所収) 本書の元文 5 年(1740) 1 月 14 日の条に、黒沢尻御蔵所、花巻城の本御蔵所及び新御蔵所、郡山御蔵所の御蔵奉行名が記されている。
- 35)前掲 23) 紫波町史編集委員会編:紫波町史第 1 巻, pp. 342~343 及川雅義:花巻町史上・下巻,北加美社,1952, p. 45 「雑書」(盛岡藩雑書第 1 巻, p. 392) 本書の慶安 2 年(1649) 12 月 24 日の条に、「一、今廿二日夜花巻御蔵破御米盗、其上火を付、米二三俵焼候、清蔵并蔵番之者・日用取之類口書一通(後略)」とあり、藩政前期であるが、蔵番の者どもが花巻城の御蔵所の米を盗んで罰せられている。
- 36)黒沢尻御蔵所の場合、図 3 において御蔵所の外に、「御役屋見守弥作家」の家屋が見られた。この家は、川岸にある藩の施設を管理していたものと推察される。
- 37)前掲 31)「藤崎御蔵御長屋之圖」
- 38)前掲 8) 近世期の河川沿いにおける会津藩の水運施設の空間構成に関する研究―塩川御蔵所を事例として―, p. 1724
- 39)柵、塀、垣の主な目的は、人の進入防止や目隠しといった防犯である。一方、屋敷林の目的は、防風や用材の生産などであるが、米沢藩領最上川沿い宮船場の「御蔵屋敷」においては、廻米の船での積み出しを外部から見られないように、屋敷林を設けていたことが伝えられている。つまり、防犯の機能もあった。
- 40)会津藩・塩川型の場合、屋敷林が見られたが、明確な囲い及び、門は確認できなかった。しかし、藩が御蔵所の門内においての飲食物の販売を禁止していたことから、門の存在が推察された。
- 41)文政 11 年(1828)の『黒沢尻川岸絵図』(図 2)には、「御蔵御構内せまく殊ニ火之用心あやうき事ニ被思召、依而、七郎治、惣右エ門、新内、善八、五兵衛持屋敷御取上地ニ被仰付御代官処より肝入老名被仰付、二月廿日ニ右五軒之地面家共ニ間数相改大館屋敷之内御蔵御構共ニ絵地面ニ而廿一日ニ書上差上候」と記されている。これらの家のいくつかは、御蔵所の西側の屋敷地に見られる。弘化 3 年(1846)の『黒澤尻御蔵并御艀所御船御繕所御用地繪圖面』(図 3)を見ると、御蔵所西側の道に接する屋敷地の多くが御用地になっている。

図版出典

図 1、8 筆者作製

図 2 「黒沢尻川岸絵図」,文政 11 年(1828),齋藤慶太郎氏蔵 本図に、「文政十一年子二月御蔵より川岸中繪地面御代官所江書上写」と記されている。戸々に居住者の名前が記されており(省略)、河港集落を描いた藩政期の絵図の中では詳しいものと言える。

原因図の写真をトレース(一部の文字等を除く)し、()の文字、方位を追記した。

図 3 「黒澤尻御蔵并御艀所御船御繕所御用地繪圖面」,弘化 3 年(1846),北上市立中央図書館蔵 本図には、土地や建物の長さも記されている。

原因図の写真をトレース(一部の文字等を除く)し、()の文字、凡例、方位を追記した。

図 4 「稗貫和賀両郡御蔵其他繪圖面」のうちの一枚,明治 7 年(1874),岩手県蔵 本図は、城など旧藩の施設の土地、建物の払い下げのために作成された資料の一部である。土地や建物の長さが記されているものの、縮尺には注意して描かれていないと見られる。しかし、建物配置の検討には十分に足りると考えられる。

原因図の写真をトレース(一部の文字等を除く)し、()の文字、凡例を追記した。

図 5 「花巻御城廓圖」,盛岡市中央公民館蔵 作製年については、『花巻市史(史蹟花巻城)』(熊谷章一:花巻市教育委員会,1969)に化政期(1804~1829)頃と記されている。また、文政 7 年(1824)に普請した「為御登米川岸出道」が描かれていることから、文政期(1818~1829)頃とした。本図には、城内二の丸及び、三の丸の建物(省略)や、城の内外の家中や寺院の屋敷地などが描かれている。花巻の城絵図の中では縮尺が最も大きく、

御蔵所など各屋敷地の広さに注意して描かれたものと推察される。

上図については、原図の写真をトレース（詳細部分、一部の文字を除く）し、（ ）の文字、奥州道中の部分、方位を追記した。

下図については、南御蔵所付近をトレースし、（ ）の文字を追記した。

図6 「花巻古図（写）」, 佐藤勉氏蔵（花巻市博物館保管） 本写図に、「嘉永三庚戌年（1850）十月吉日 上山廣淵写之」と記されている。原図の作製年は、御蔵所が「本御蔵」や「新御蔵」と記されていることなどから、文化12年（1815）以前と考えられる。また、本図の瀬川は、川幅が広く、藩政後期に架けられた橋は描かれていない。従って、御蔵所付近から北上川へ船で通じていた頃のものと考えられる。

原図の写真に、（ ）の文字、方位を追記した。

図7 「二日町新田村絵図」, 弘化3年（1846）, 岩手県立図書館蔵 本図中に「百間四寸積取調候分間繪圖面」と記されている。

左図については、原図の写真に、（ ）の文字、道の部分を追記した。

右図については、御蔵所部分の写真に、（ ）の文字を追記した。

（2010年5月7日原稿受理，2010年7月20日採用決定）